利用しつつ様々な論点に言及していることから、これからの清代華北研究にとって共通の出発点になるものと思われる。また本書は、清初から近代にいたる農業経営とともに、本書評では十分触れることができなかった村落構造についての考察も含んでおり、研究全体を俯瞰する役割を果たすものと考えられる。総合的な俯瞰図としての本書を活用していくことが、今後の課題となってくるであろう。

註

（1）田中正俊『中国近代経済史研究序説』第二編第一章　東大出版会　一九七三

（2）岸本美緒「清代物価史研究の現状」『中国近代史研究』五　一九八七

（3）渡辺利夫『開発経済学――経済学と現代アジア』第Ⅲ章　日本評論社　一九八六など

（4）羅崙「関于清代以来冀――魯西北地区的農村経済演変型式問題」『中国経済史研究』二　一九八八

（A五版、本文三一七頁、附録一八頁、引用書刊目録三三頁、中華書局、一九八六年四月）

A＝ローナ-タス「東テュルク『ルーン』文字の発展と起源とについて」

護　雅夫

古代テュルク-ルーン文字、我国でいわゆる突厥文字の起源については、たとえば、O＝ドンネル（O. Donner）、V＝トムセン（V. Thomsen）、R＝ゴーティオ（R. Gauthiot）、G＝クロースン（G. Clauson）、V＝A＝リフシツ（V. A. Livšic）そのほかの研究があるが、A＝ローナ-タス（A. Róna-Tas）は、まず、「東テュルク『ルーン』文字」（the East Turkic "Runic" Script [ETRS]）の発展に関して論じ、ついで、その起源についてのべた。

ローナ-タスは、従来、ETRSの起源に関して発表された諸説、なかでも、クロースン、リフシツのそれ[1]をきわめて簡単に要約したのち、「いままでに提唱された仮説は、いずれも、説得力をもたない。それらに共通の弱点は、それらが、文字のユニークな内部構造に解答を与えず、文字の内部的発展を考慮していない点にある」といい、ほぼつぎのようにしるす。

「この文字の外見上奇妙な構造に解答を与えようと努め

た唯一の学者はプリツァク（Pritsak）であった。彼が提唱したところのうちの若干は非常に独創的であるが、説得力を有するものは少ない。[2] 我々は、彼とは独立して、No. 27（Y、Y、Y。s^1, s^2, s^1）が、No. 15（Y。l^2）の二次的発展であることを認めたし、また、私は、*k*をしめす記号が多い理由は、この音素が頻出することであるという点についても、彼に同意する。しかし、ほかの点では、我々の取りあげかたと結論とは、まったく異なっている。私は、繁雑さを避けて、プリツァクの提唱を検討することはやめ、また、以前の諸意見の詳細にはたちいらず、自分の取りあげかたを提案する。私は、よりすぐれた解決が、ほかの諸仮説にたいする最良の批判であると確信する」。

ローナータスは、このあと、D＝D＝ワシリエフ（D. D. Vasil'ev）の二著作をあげて、「これらの業績ののち、イェニセイ河流域、および、そのほかの、南シベリア地域の諸銘文は、かつて考えられていたほど古いものではなく、それらが、モンゴル高原で発見された諸大碑文と、あるいは同時代のものであり、あるいはそれらより新しいものであることが、最終的に証明されたと思われる」といい、大略、以下のごとくのべる。

ETRSの三九書記素は、つぎの六群[3]に分けられる。すなわち、（A）母音をしめす文字、（B）当該の単語にともなう母音が前舌であるか後舌であるかによって異なる「対[5]をなす文字（"paired letters"）」、（C）*k*の諸異音（allophones）をあらわす文字、（D）歯擦音をしめす文字、（E）母音の性質にかかわりない子音をあらわす文字、そして、（F）子音の連続音（consonantal clusters）をしめす文字、――この六群である。

まず、母音文字として、*ė*, *a*/*ä*, *ï*/*i*, *o*/*u*, *ö*/*ü*の五個が数えられるが、これらのうち、*ė*は、イェニセイ地域のわずかの銘文に見られ、もっとも新しく出現したものである。*a*/*ä*と*ï*/*i*とは、後舌母音と前舌母音との対をしめす共通の記号である。これにたいして、*o*/*u*と*ö*/*ü*とは、開いた音素と閉じた音素とについて、同じ文字が用いられるさいの唇音をあらわす共通の文字である。「この母音体系は、セム文字よりただ一つだけ多くの母音記号を有している。それは、特殊なテュルク語音声群、つまり、前舌の*ö*と*ü*とをしめす一文字である。この記号が二次的なものであるという仮説は、その形態を見れば、大いにありうることといえる。トムセンは、これは、No. 3（ᛏ。*ï*/*i*）に、識別標識（diacritical mark）を付して作成されたものであるという[4]説を提唱した。要するに、ᛏ'がᛏになったというのである。そうだとすると、我々は、母音記号の歴史を、三段階（three stages）に再構成することができる。すなわち、I. *A* : *W* :

I, II. *A* : *W* : *I* : *Ẅ*, III. *A* : *ė* : *W* : *I* : *Ẅ*[5]——この三段階である」。

ローナータスは、「これは、諸文字（scripts）が発展するのを常とした通常の径路のように思われる」といって、「子音文字の場合に、類似の発展が見られるであろうか」と問い、ほぼ以下のように答えてゆく。

たとえば、b^1をしめす文字とb^2をあらわす文字とがたがいに独立しているように、「対をなす」子音記号は、どれ一つとして、形態的に、それぞれの対となる文字と関係づけられえない。トムセンは、最初に発表した論文[6]に付した註のなかで、r^2, l^2, t^1, n^2, g^1, $\check{s}$（この場合は、イェニセイ碑文にだけ見える$\check{s}^1$-$\check{s}^2$）をしめす諸文字は、象形文字ではなかったであろうかと問い、E＝O＝ポリワーノフ（E. O. Polivanov）、A＝C＝エムレ（A. C. Emre）も、似たようなことをのべた。そのうち、b^2, k^4, y^1が象形文字起源であることは、A＝フォン＝ガベン（A. von Gabain）、クロースンによって提唱された。そこで、もし、d^2も象形文字起源であったとすれば、それぞれの対のうちの一方は、象形文字起源であったということになる。ここで付言しておかねばならないのは、マニ文字で転写されたルーン-アルファベットからわかるように、すべての子音が、その前の一母音とともに読まれたことである。こうして、つぎの表がえられる。

	b^1	*ab*	b^2	*eb*	「天幕，住居」
	d^1	*ad*	d^2	*ed*	「財産，家畜」
	g^1	*ay*「鵜」	g^2	*eg*	
	y^1	*ay*「月」	y^2	*ey*	
	l^1	*al*	l^2	*el*	「手」
	n^1	*an*	n^2	*en*	「下り勾配」
	r^1	*ar*	r^2	*er*	「人間」
	t^1	*at*「馬」	t^2	*et*	

そして、さらに、

k^3	*ik*	「紡錘」
k^4	*oq*	「矢」

というように考えられる。

これらのうち、y^1は*yay*「弓」であろうといわれてきた。象形文字としては、それはありえようが、すべての象形文字が、当該の子音の後ではなくて前の母音とともに読まれることから考えて、体系がこの可能性を排除する。トムセンは、n^2にたいして*en*-「降りる」を提唱したが、そうだとすると、これは、唯一の動詞であるということになる。ところが、名詞*en*は、カーシュガリー（Kāšgarī）のDīvānに見えている。トムセンは、また、$\check{s}^1$-$\check{s}^2$にたいして*üšik*「戸口」

を想定したが、すべての「キーワード」は単音節である。d^2にたいする象形文字は、家畜が類似の記号によってしるしづけられた符木(しるしぎ)に由来している。さらに、k^4およびk^5は、それぞれ、o/uおよび$\ddot{o}/\ddot{u}$と結びついているから、これらは、$\ddot{o}/\ddot{u}$があらわれた、母音記号の第二発展段階(II)と同時か、または、それ以後に出現したものである。

ローナータスは、これにつづけて、歯擦音s^1, s^2, $\check{s}^1$, $\check{s}^2$をあらわす文字を、それらがあらわれる諸碑文の年代順に列挙し、それらのうち、ーとへ($\check{s}^1$-$\check{s}^2$.イェニセイ銘文)とをのぞく文字が、基本的記号Y(l^2)のそれぞれ違った箇所に一つづつの識別標識が付された二次的なものであることを指摘して、「l^2をしめす文字に識別標識を加えた文字が、どのようにして、また、何故、$\check{s}$をあらわす文字になったのであろうか」と問い、以下のように答える。「もし、この文字(Y。l^2)が、もともと、$\check{s}$を有しない一テュルク語(a Turkic language)にたいして用いられ、そののち、この文字が、かつてある箇所ではlがlに対応するが、他の箇所では$\check{s}$に対応する一テュルク語に受け継がれたと想定するならば、混乱が生じたことであろう。もし、誰かが、『民族など』の意味でelと書いたとしても、これは第二のテュルク語(the second Turkic language)においてもelであったから、このことは何の問題も惹起しなかった。しかし、もし、誰かが、『仲間、僚友』の意味でelと書いたのならば、これは$\check{s}$と読まれなければならなかった。こうした『$\check{s}$と読まれるべきl』が、識別標識を付してしめされたのである。しかし、$\check{s}$をあらわすのに、もう一つ別の可能性もあった。すなわち、sの文字でしめすことである。これが、筆記者たちの最初の選択であるように思われる。しかし、その反面、ビルゲ＝カガンの宮廷で、この方式は、ほかのものと組み合わされた。つまり、そこにおいて、l^2に識別標識を付したものがあらわれたのである。ウイグル時代の碑文では、主要な相違は、sと$\check{s}$との間にではなく、後舌母音の歯擦音と前舌母音のそれとの間にあり、それらを全体の体系に適合させる努力が払われた。$\check{s}$($\check{s}^1$-$\check{s}^2$)をあらわす新しい文字(へ)は、イェニセイ銘文において出現したのである」。

ついで、ローナータスは、これと同様な二次的起源の文字として、$z, \eta, \check{n}$をあげる。すなわち、まず、z(ち、ち)は、基本的記号r^1(ヤ)に鉤を加えたものである。「このような鉤は、ウイグル文字においても、識別標識としてあらわれる。周知のように、後期ソグド文字(the late Sogdian script)とウイグル文字との間の唯一の主要な相違は、子音lをあらわす文字が存在しなかったから、テュルク人がResh文字に鉤を付し、それがlと読まれるべきReshであることをしめした点にある。『zと読まれるべきr』をしめ

す、ETRSにおける鉤は、類似の機能を有している」。つぎに、*n̄*（ㄱ）は、基本的記号*n*（ㄱ）に識別標識を付したもの、そして、*n̄*（ㄱ）は、*n*を上下に重ね合わせたものである。さらに、ローナ-タスによると、*ld, nd, nč*の三文字もまた、テュルク語をあらわすために、とくに作成された新しい文字であるという。

そうだとすると、ETRSは、少なくとも、つぎの四段階（four stages）をへて発展したということができる。

I. A, I, W, b, d, g, y, l, n, r, t, k^1, k^2, s^1, s^2, č, p, m

II. W̄　b^2, d^2, g^1, y^1, l^2, n^2, r^2, t^1, ŋ, ñ, k^3, k^4, k^5

III. š, z　$š^{1-2}$　ld, nd, nč

IV. ė

ローナ-タスはつづける。

このように、「もっとも初期の段階」と、「そののちの諸発展」とを区別してはじめて、我々は、その最初期の文字の手本または起源を求めることができるのである。トムセン以来、「より古いソグド-アルファベット（the older Sogdian alphabet）」が、つねに考慮されてきたけれども、直接的な関係は排除されねばならない。ソグド-アルファベットを、アラム文字起源のほかの諸アルファベットから区別する、その典型的な特徴は、Lamedが、通例は、既知のもっとも古いテキスト――いわゆる「古代ソグド語書簡」――において、摩擦音δ（および、若干の借用語にあってのみ*l*）をあらわしたことである。しかるに、ETRSでは、*l*がLamedであって、d^1でもd^2でもない。他方、若干の形態は、「古いソグド文字の諸形態（the Old Sogdian forms）」に非常に近く、また、そのほかの若干の文字は、グルジアの古代都市アルマズ（Armaz）で発見された、「いわゆるアルマズ-アルファベット（the so-called Armazic alphabet）」に見られる形態を有している。そこで、「我々は、原初的な（primitive）ETRSは、古いソグド文字（the old Sogdian）、および、アルマズ文字に近いが、どちらとも同一でない一アラム-アルファベット（an Aramaic alphabet）にさかのぼると結論せねばならない。十中八九、三者すべては、同じ共通の起源を有すると考えられる」。

ローナ-タスは、このあと、大略、つぎのようにしるす。

ソグド文字そのものの影響は、のちになってあらわれた。子音の連続音をあらわす三文字、*ld, nd, nč*は、十中八九、ソグド文字の影響をしめすと見てよい。*ld*をしめす文字（ㄇ）は、恐らく、ソグド文字のLamedを向かい合わせたものと思われる。*nd*をあらわす文字（ㄴ）は、ソグド文字のNun（ㄱ）に、識別標識として一点が付されたものである。この文字は、トニュクク碑文では、まだ、上部が開いており、付されたのは一点だけであるが、キュル＝テギン、ビルゲ

"カガン両碑文では、三点になり、のちには、半円が閉じられて円形になった。*nč*をしめす文字（ɜ）は、*n*が上下にならべられたもののように思われる。*γ*-1から*n*を作成するために鉤が選ばれたのも、ソグド文字の影響を反映するものであろう。

ローナ-タスは、ほぼ以上のごとくのべたあとで、自説を、つぎのように要約する。

「テュルク人は、ソグド文字、または、アルマズ文字に近いが、どちらとも同一でない、アラム-アルファベットの一形態を受け継いだ。最初の諸変化は、この文字が、木、石、岩に刻まれるか、彫られるかしたときにおこった。このアルファベットが一時期（for a time）使用されたのち、それは、特殊なテュルク語の音声体系をあらわすに当たって、諸困難を導きだした。後舌と前舌という母音の対立を区別する必要がもっとも明白であり、そこで、彼らは、新しい記号を作成した。新しい文字を作成するには、二つの方法が用いられた。すなわち、既存の文字に識別標識を付することと、象形文字を利用することとである。Kをしめす文字がより多く選ばれたのは、*k*の音素がもっとも頻出するという事実に由来していた。この言語には、*δ*と*z*の音が存在しなかった。それは、チュヴァッシュ型（タイプ）、古ブルガール語、または、ハザール語に類するものであったに違いない。第二テュルク可汗国は、この文字を受け継ぎ、*z*をあらわすのに巧妙な解決法を発見したが、*δ*については、より長い実験期間を要した。彼らは、*ld,nd,nč*をしめす特殊な文字を作成した」。

ローナ-タスは、これにつづけて、大略、以下のごとくしるし、この論文を終えている。

この文字は、第二テュルク可汗国の官房で高い権威を有していたため、地方的諸君長によって手本とされた。この高い官房スタイルの衰退が、マニ教への改宗、および、マニ文字、さらに、のちのソグド-ウイグル文字の採用と関連していたことはたしかである。この衰退は、地方的諸異体の発生をもたらした。そして、ETRSが紙面に書かれたとき、トゥルキスタンにおいて、このアルファベットの特殊な一タイプがあらわれたのである。

以上、筆者は、ローナ-タスの論文の概略を紹介してきたが、つぎに、筆者がこれにたいしていだく若干の疑問をしるしておきたい。

この論文の目的は、まず、ETRSの「内部的発展を考慮し」、その「ユニークな内部構造に解答を与える」点にある。そこで、ローナ-タスは、母音文字は、I.*A*:*W*:*I*, II.*A*:*W*:*I*:*Ẅ*,III.*A*:*ė*:*W*:*I*:*Ẅ*,——この三段階をへて発展したとの

べ、子音文字をふくむETRS全体については、四つの発展段階を想定した。しかし、これらの、母音文字の発展段階とETRS全体のそれとの間の対応関係については、ローナータスは、一言も触れていない。敢えて整理すれば、つぎのごとくでもあろうか。母音文字は、第一段階では*A:W:I*のみであったが、これらに*Ẅ*が加わることによって第二段階へ、そして、さらに、これらに*ė*が加わることによって第三段階へ発展した。他方、ETRS全体に関して見ると、第一段階における母音文字は*A,I,W*だけであり、第二段階になって*Ẅ*があらわれ、第三段階では新しい母音は出現せず、第四段階において、はじめて*ė*が見られる。そうだとすると、母音文字の第一段階、第二段階、第三段階は、それぞれ、ETRS全体の第一段階、第二・第三段階、第四段階に対応するということになる。

それでは、これらの段階は、おのおの、いかなる時代に相当するのであろうか。

ローナータスは、ETRSの起源についてのべたのち、(1)この文字が、木、石、岩に刻まれるか、彫られるかしたときに、最初の諸変化がおこったといい、(2)「このアルファベットが一時期使用されたのち」、後舌母音と前舌母音とが対立するという「特殊なテュルク語の音声体系をあらわす」必要が生じ、テュルク人は、その必要をみたすため、「既存の文字に識別標識を付することと、象形文字を利用することと」によって、新しい文字を作成したが、「この言語には、*ś*と*z*の音が存在せず」、「それは、チュヴァッシュ型、古ブルガール語、または、ハザール語に類するものであったに違いない」とのべ、(3)「第二テュルク可汗国は、この文字を受け継ぎ」、*r*[1]に鉤を加えて*z*を、また、*l*[2]に識別標識を付して*ś*を、それぞれ、作成し、また、*ld,nd,nč*をも作ったが、これらのうち、*z,ld,nd,nč*の作成には、十中八九、ソグド文字の影響が見られるとしるし、(4)*ė*と*ś*[1]-*ś*[2]とは、イェニセイ銘文において新しく出現したものであると説く。これから見ると、ETRS全体の発展段階のうちの第一段階は上述の(1)段階に相当し、この段階の文字が「一時期使用されたのち」、第二段階へ移ったが、これは上述の(2)段階に相当し、つぎの第三段階は、第二テュルク可汗国時代になって、さらに新しい子音文字がつけ加えられた、上述の(3)段階に相当し、第四段階（上述の(4)段階）は、「イェニセイ河流域、および、そのほかの、南シベリア地域の諸銘文」の時代――モンゴル高原の諸大碑文と、あるいは同時代、あるいはそれらより後世――に相当するといいうる。母音文字についていえば、その第二段階が第二テュルク可汗国時代に相応するのである。そして、ローナータスのいわゆる「第二のテュルク語」とは、ETRS全体の第三段階をふくむ

第二テュルク可汗国時代のテュルク語に当たると考えてよい。

それでは、「一時期使用された」、ETRS全体の第一段階の言語、および、「ȣを有しない一テュルク語」とか「ȣとȣの音が存在しなかった」とかいわれる第二段階の言語――第二テュルク可汗国がETRSを受け継いだ――とは、何を指すのか。これらのうち、後者について、ローナ-タスは、「それは、チュヴァッシュ型、古ブルガール語、ハザール語に類するものであったに違いない」とのべているが、それらの言語、および、これらを用いたテュルク族が、資（史）料上、どのように呼ばれたかはまったく不明であるし、それらの文字で彫された銘文、碑文の類も知られていない。また、母音文字については、第二テュルク可汗国以前に一段階が、そして、子音文字に関しては、第二テュルク可汗国で新しい子音文字が作成されるまでに二段階が、それぞれ、設定されているが、そのいわゆる「段階」(stage)として、どの程度の長さの期間が考えられているのかも明らかでない。以上指摘したことが明確にならないかぎり、ローナ-タスの見解に、軽々にはしたがうわけにはゆかない。筆者は、むしろ、「ルーン文字が出現したのは、ソグド-アルファベットに、ただ一回、意識的に手を加えた結果であって、それの、長期にわたる自然発生的な変形の帰結ではない」というリフシツの意見[8]に左袒するものである。

つぎに、ローナ-タスが、ETRSの象形文字起源に関して提唱したところにも問題がある。ᛋ（y^1, $ȣ^y$）が「月（*ay*）」を、ᛦ、ᛏ（*oq*, *uq*）が「矢（*oq*）」を、そして、ᛒ（b^2, $ö^b$）が「テュルク人の天幕（*öb*）」を、それぞれ、あらわしたものであることは、すでにトムセン以来説かれている。そして、トムセンが、これらと同じ例として、r^1, l^2, t^1, n^2, g^1（*γ*）, ȣをしめす文字をあげていることは、ローナ-タスがのべているとおりである。すなわち、つぎのごとくである。ᛚ（r^2, *ir*）＝「人間（*ir*）」。ᛉ（l^2, *il*）＝「手（前腕とともに）（*il*）」。ᛏ、ᛏ（t^1, *at*）＝動物の四肢、または、動物の図式化された背にまたがった人物（の脚）によって表現された「馬（*at*）」。ᛖ、ᛖ（n^2, *in*）＝階段の形によってあらわされた、動詞の語幹「降りる（*en-*）」（命令形、*en*「降りよ」）と比較せよ。ᛝ、ᛝ（*γ*, *ay*）＝おそらく、「網（*ay*）」、とくに、この名詞が漁における手網をしめしえたならば。ᛁ、ᛁ、ᛁ（ȣ）＝「戸口（天幕の入口）（*ȣik*）」か？　しかし、トムセンは、これらは、「おそらく、多少とも空想的」であり、「いうまでもなく、これらの比較の厳密な証明は問題外である」とのべている。[9] ローナ-タスが、この発言を考慮せず、これらの文字の象形文字起源説をすでに証明ずみのこととして採用しているのは如何なものであろうか。ま

た、d^2,*ed*の起源を「家畜が類似の記号によってしるしづけられた符木」(×)に、そして、*ik*の起源を「紡錘」(ㄑ、ㄆ)に、それぞれ、求めるローナータスの見解も、さほど説得的であるとはいえない。

つぎに、ローナータスは、*š,n,nd*は、おのおの、基本的記号に識別標識が付されたもの、*ld*は、ソグド文字のLamedを向かい合わせたもの、*nč*は、*n*を上下にならべたもの、*n̄*は、*n*を上下に重ね合わせたもの、そして、*z*は、ㄟ$^{-1}$に鉤が加えられたものであるという。これらの説は、傾聴に値すると思われる。

ローナータスは、ETRSが以上のような発展をとげたことをのべ、起源の問題をとりあげて、「我々は、原初的なETRSは、古いソグド文字、および、アルマズ文字に近いが、どちらとも同一でない一アラム-アルファベットにさかのぼると結論せねばならない」、また、「テュルク人は、ソグド文字、または、アルマズ文字に近いが、どちらとも同一でない、アラム-アルファベットの一形態を受け継いだ」としているが、アルマズ文字なるものについて些かの知識をも有せぬ筆者には、この見解について云々する資格はない。

いずれにしろ、本論文は、ETRSの、とくに発展について、ローナータス独自の意見をのべた、「ユニークな」ものといいうるであろう。

註

(1) クロースン、リフシツの見解については、『東方学』(第七九輯、一九九〇年一月刊行予定)において紹介する予定である。

(2) これらの文字をしめす番号は、本論文の付表Iにおけるそれである。以下同じ。

(3) 原文には「五群(five groups)」とあるが、これが誤植であることはいうまでもない。これにかぎらず、本論文には、誤植と思われる箇所が少なくない。

(4) トムセンは、ㄈ、ㄅ(*ö/ü*)は、ㄊ(*i/i*)の右側に、ㄅ(*o/u*)の下部を付して、作成されたものであり、したがって、この結合文字は、本来、*üi*をあらわしたが、*üi*が*ü*音の記号となったのは、たとえば、ウイグル-アルファベットにあっても見られるという。V.Thomsen, *Samlede Afhandlinger*,t.III, Kφbenhavn, 1922, p.78.

(5) *A*は*a/ä*を、*W*は*o/u*を、*I*は*i/i*を、そして、*Ẅ*は*ö/ü*を、それぞれ、しめす。

(6) 「最初に発表した論文」ではなく、*Samlede Afhandlinger*, t.III においてである。Thomsen, *ibid.*, p.79, n.1.

(7) 付表Ⅰでは、'k̈がk^3, ẅk̈wがk^4, wkwがk^5としてしめされている。この表のk^4はk^5の、k^5はk^4の、それぞれ、誤植であろう。すなわち、本文でいわゆるk^4は、ẅk̈wではなく、wkwを指すと考えるべきである。

(8) V.A.Livšic, "O proishoždenii drevnetjurkskoj runičeskoj pis'mennosti", *Arheologičeskie issledovanija drevnego i srednevekovogo Kazahstana,* Alma-Ata, 1980, s. 9.

(9) 前註(6)参照。

A. Róna-Tas, "On the Development and Origin of the East Turkic "Runic" Script", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae,* Tomus XLI (1), 1987, pp.7～14.

第七十一巻　一七二

黄文弼著・田川純三訳
ロプノール考古記(二)終

榎　一雄

一

ロプノール地区というのは、北はクルック＝ター、南はアルキン（アルシン）＝ター、東は玉門・陽関、西はチチンリック以東に圍まれた、タクラマカン砂漠東端の地区を指す。その中央にロプノールを擁する。ロプノールの海抜は八七〇米。タクラマカン砂漠の最低部をなす。史前時代にはロプノールは塩水湖で、タリム河及びコンチェ河の水を入れていた。タリム・コンチェ灌漑地域の拡張に伴って河水の激減を来たし、九、十世紀には一四、〇〇〇平方粁に達したロプノールの面積は、一九六〇年代には最大三、〇〇〇平方粁余に減じ、その長さ一〇〇粁余、水深約一米、底辺と周辺とは塩の泥沼で、水位の低い時は幾つかの水溜りに分かれ、或る部分は乾いた塩の層に覆われる。十一月から三月までは大部分は底まで凍り、年によると、タリム